

小中一貫におけるネット型ボール運動の指導カリキュラム開発

—ソフトバレーボールの発達段階における指導方法 I—

下野 素文 神重 修治 矢藤真二郎 木原成一郎
松田 泰定

1. はじめに

本研究の目的は知識理解(分かる)に裏打ちされた運動技能の獲得(できる)の学習,健康観やゲーム運営など生涯スポーツに生かす(いかせる)学習を総合した学習カリキュラム開発を行うことである。2003年6月より研究プロジェクトを構成し研究を開始した。まず初年度は,小学校高学年における必修種目であるサッカーとバスケットボールを教材としてねらいを共通化した指導方法を開発する研究を行った。

2年目には,サッカーとバスケットボールの種目もつ指導上の課題解決の方法として今,新しいボール運動として注目されているフラッグフットボールを採りあげ,中学1年と小学3年,6年の指導内容を考案し,授業の実践を通して児童・生徒の状況判断能力の育成に向けた方策を検証してきた。

今年度は,新たにネット型のボール運動である「バレーボール」に注目し,小中一貫で研究開発していくことにした。本学園では,今年から「21世紀型教科学力」として,「協同的創造力」に着目し,その力を育むために,「協同的創造学習」を新たな教科学習のスタイルとして研究していくこととなった。体育科では,「協同的創造力」について考えるにあたって,子どもたちのコミュニケーションスキルの重要性に着目し,有効な教材としてネット型の「バレーボール」を選び,小中で連携しながら取り組むことにした。本学園の体育科においては体育科教員が指導している小学1年・4年・6年・中2年の指導内容を考え,授業実践を通して児童・生徒の発達段階に応じて検証を進めていくことにした。今回は,その中から小学1年・4年,中学2年の実践について報告する。

2. 実践に向けて

(1) 教材の特性

「バレーボール」が国際的に普及した原因について

は次のことが考えられる。まず,ネットによる境界線が相手チームとの直接的な接触を防ぎ,危険性が少ないこと。そして,年齢や性別の制約を受けず,相応の運動量が確保できるゲームであるとともに,季節によらずいつでも屋内外でのプレーが可能なことなどがある。加えて用具も簡単で,少しの広場があれば,いろいろなルールで一度に多くの人でプレーが可能である。

しかし,小学生では,誰もがプレーするには,ボールが硬くて重く,また,授業向きのルールが確立していないなどの理由で児童には,馴染みが薄いスポーツでもある。バレーボールは,ボールを繋いでいくところに大きな楽しみや喜びが生まれてくると考える。心が通い合っこそ,パスがつながり,相手チームに攻撃をすることができる。また,お互いに心を通わせることの大切さに気づきチームゲームとしての認識が生まれたとき,豊かな人間関係力が育ってくるのが期待できる。

(2) 研究の視点

学習指導要領の中での「バレーボール」についての扱いは,5・6年生の副教材として指導されることが多くまた,中学校では,競技バレーとしての指導法が確立していて,小学校段階では,子どもたちにとっては,馴染みがあまりない。小学1年生から中学3年までのバレーボールの指導法を考えるにあたって小学校では,次のようにとらえた。

①誰もが今もっている力で楽しむことができる

ボールが軽くて柔らかいソフトバレーボールを使用することにより,ボールに対する恐怖感が少なく,誰もが安心してプレーすることができる。また,初期の段階では難しい技能を必要としないことから,ボール運動が苦手と感じている子どもでも十分に楽しむことが可能である。

②自分たちの作戦が実現しやすい

ネットで区切られ、決められたコート内であるため、相手と接触することがほとんどなく、ボールが飛んでくる方向もだいたい決まっている。そのため、自分たちで考えた作戦が、ゲームの中で実現しやすくなる。

③ コミュニケーションがとりやすい

プレーが1回ごとに途切れるため、チーム内でのコミュニケーションがとりやすい運動である。ゲームの中でも、狭いコートの中でチームの仲間と声をかけあったり作戦を確認し合ったりすることが容易で、チームの意識の調和をはかるのにたいへん適している。

バレーボールには、ボールに連続して触れることができないという特徴がある。バスケットボールやサッカーのように自分でドリブルをしたり、フラッグフットボールのようにランプレーしたりすることはできない。1回の触球で自分の役割を果たさなければならないため仲間との意志交流がより焦点化される競技である。仲間とのボールのつなぎ方を学ばせる手段として、プレーのイメージ(作戦)をチーム内で共有化する話し合いの活動が必要になってくる。また、ボールの種類やコートの広さ・ネットの高さなどの環境設定や学年の発達段階に応じたルールづくりを考えていくことにより、子どもたちの実態にあったものにしていくことも重要である。これらのことをもとに組み込んだ実践例を示す。

3. 今年度の実践①

単元「はじめて うって ぼんぼんぼ～ん」 ～ボールとなかよし～(基本の運動)
学年 小学校第1学年(39名)
実践月 平成17年5月

(1) 単元について

① 教材について

この運動は小学校中高学年のソフトバレーボール・中学校のバレーボールにつながる教材である。子どもたちがボールゲームをより意欲的に参加するためには、そのゲームの理解と技能そしてコミュニケーション能力などが必要である。この教材ではバレーボールの入る前段階としてボール感覚・操作の技能面に重点を置き、楽しみながら身につけさせるように単元を構成した。また、グループ活動を取り入れ、コミュニケーション能力も養っていくようにした。

② 子どもの実態

本学級の子どもたちは、休憩時間になると外へ出て元気よく遊ぶ児童が多い。事前調査では運動が好きと答えた児童は90近くで、残り10%(5名)が好きでないと答えた。ボール遊びでも似たような結果になった。

ボール遊びでは多くの児童が「したことがある。」と答えたが、よくボール遊びをしている児童は男子の一部でサッカーやキックベースボールなどである。ボールをはじめて遊んだ経験がある児童は8人であった。学習集団では、友達とかかわりをもちながら学習を進める姿も見られるが、集団で活動していても友だちのことを考えず、自分の思いを最優先する児童が多い。

③ 指導にあたって

単元・授業構成をするにあたって次の3つのことに重点をおいた。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">○ ボール感覚・技能を養うために、補助運動から主運動を通していろいろな運動をする機会をつくる。○ ボールに対する恐怖心をもたせないことと、「できる」喜びを味わわせるための工夫をする。○ 集団で行う運動場面をつくり、コミュニケーション能力を養う。 |
|--|

準備したボールは、ビニル製のソフトバレーボール用の30g、50g、100gとゴム製のソフトバレーボールである。その他、紙風船と風船、ビーチボールを使って指導していった。ボールは柔らかく、あたったり、はじいたりしても痛くない物を考慮して選択した。紙風船や風船を用意したのは、落ちるスピードが遅いので自分とボールの位置感覚がつかみやすく、また操作しやすいため、ボール遊びが苦手な児童でも意欲的に活動できるからである。

また、個人とする運動と集団とする運動を単元の中や授業の中で組み合わせるようにした。単元では第1次と第2次の前半を主に個人とする運動を中心に、第2次の後半から集団とする運動を中心にした。授業の中でも前半は補助運動も含めて、個人の運動を行う。後半は主運動を集団とするようにした。これは、個人でできるようになったことを集団の場で生かすということと、コミュニケーションを養うための2点から考えた。

集団であればコミュニケーションを養えるわけではないので、児童が進んで友達とかかわろうとするように運動をゲーム化した。その中で声をかけ合ったり、カバーしあったりすることで協力して成し遂げる喜びを経験させることができると考えたからである。

(2) 単元の目標

- 順番やきまりを守り、なかよく・安全に運動遊びができるようにする。
- ボール運動が楽しめるようにボールを選択したり、動きを考えたりできるようにする。
- いろいろなボールや方法でボールをはじくなどして、楽しく遊ぶことができるようにする。

○ いろいろなボール操作を知り、ボールの特性が分かるようにする。

(3) 計画 (全7時間)

- 第1次 学習のねらいや学習の進め方を知る
約束の確認をする。ボールで自由に遊ぶ。
..... 2時間
- 第2次 いろいろなボールや方法でのボール運動遊び
..... 4時間
- 第3次 自分(集団)で考えたボールを使った運動遊び
..... 1時間

(4) 授業の実際

(第1次)

初めに、単元名「はじいて うって ぼんぼんぼん ~ボールとなかよし~」を見せて、言葉を動きに合わせて考えさせていった。例えば「はじくってどういふこと。」という問いかけから、実際に子どもたちに動きをさせながら全体で共有した。片手ではじいたり、頭の上ではじいたりしていた。足でもはじくと考えている児童がいたので今回は手ではじくことを確認した。また、数種類のボールを紹介した。ゴム製のソフトバレーボールを知っている子どもが多くいた。また、風船や紙風船を紹介したときには「これなら簡単にできる。」等の反応が返ってきた。最初は足で蹴ってはいけないことを確認して、いろいろなボールで遊ぶことをめあてにして自由に遊んだ。次時に場や運動内容を紹介した。大きく分けて3つの場を設定した。

1人で運動する場は、「的あて」(サーブのような感じ)、「ジャンプアタック」(つり下がったビーチボールをうつ)、「まわってぼんぼんぼん」(はじきながら、カラーコーンをまわって帰る)、「その場ぼんぼんぼん」(なるべく動かないではじく)である。

2人で運動する場は、「ふたりでぼんぼんぼん」(2人で交互にはじき合う)である。発展としてゴムを用意し、ゴムを挟んで打ち合うのも楽しいことを伝えた。

4人で運動する場は、「チームでぼんぼんぼん」(4人ではじき合う)である。この場では、10回連続という目標を示した。

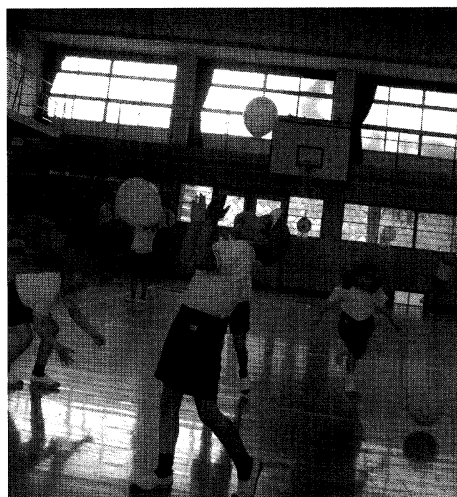
1つ1つの場をみんなで運動したり、確認したりしながら紹介していった。子どもたちは1人で運動する場に興味を持っているようであった。次時にはグループで各場をまわって運動することを確認して終わった。

(第2次)

前時で紹介した場をグループごとにローテーションでまわった。グループは10グループで生活班を使った。入学して2ヶ月もたないのあまりグループを変えない方がコミュニケーションが取りやすいのではない

かと考えたからである。実際に子どもたちも普段からよくかかっている友達なのでグループで活動することは楽しんでた。しかし、この時期では、まだグループでローテーションをまわり、進んで運動に関するコミュニケーション(友達の運動を見て応援や声かけ)を取ることは難しいようであった。自分が楽しみたいことが優先し、周りの様子はあまり見られない実態があった。

そこで、第2次を1時間増やし友達とのかかわりを深めるために主運動でゲーム化を図った。1時間の授業の流れは、補助運動の時間を多く取り、個人の技能を中心に一人ひとりがしっかりと運動できるようにした。ここでは、はじいたり、うったりするだけでなく、上に投げたり、捕ったりしながらボールと自分との位置を把握する力やタイミングを取りながら捕ったり、はじいたりする力をつけることを主な目的としておこなった。子どもたちは教師の模範を見て、運動をしていったが、その運動ができること次の新たな課題を見つけて挑戦していった。例を挙げるとボールを上に向けて1回手をたたいて捕る運動では、その運動ができると2回、3回手をたたくことにチャレンジするようになった。



また、その運動ができやすいようにボールを替える子どももいた。主運動ではゲーム化を取り入れ、2つの運動をした。1つ目はリレーである。リレーをすることによって、友達の様子をよく見て応援をしたり、声をかけたりするのではないかと考えたからである。リレーははじきながら一定の場所まで行き、「ジャンプアタック」を2回して帰ってくる内容にした。実際に子どもたちはしっかりと友達の様子を見て応援することができた。また、「速く。」と言う友達の言葉で、ボールのはじき方やうち方に変化が見られた。うち方など

からボールを上への意識よりも前への意識が強くなったように感じられた。

2つ目は、「チームでぼんぼんぼ〜ん」である。何回続けることができるかに挑戦する課題である。ルールを付け加え、2回続けてうてないことと全員が1回ははじかなければならないこととした。今持っている力を集団の中でいかす場面でもある。友達とボールとの距離を感じながら運動を行っていた。

また、「○○さんって。」「いくよ。」「高く上げて。」などの声が上がようになってきた。全グループを一度にできないのでペアグループを作り、半分ずつおこない互いに見合うようにした。見ているグループは数を数えるようにして、友達の様子を見るようにさせていった。その中で数を数えるだけでなく、応援や声かけもでてきた。第2次では、多くの児童が風船を使って運動をしていた。

最後に次時（第3次）では、これまで学習してきたことと自分たちでしたい（考えた）遊びをグループであることを示し、次時までどんなことをしたいか話し合っておくようになげかけた。



〈第3次〉

休憩時間等、子どもたちによびかけて多くのグループがしたい遊びを考えてきていた。これまで学習してきたことはできるようにこれまで使ってきた教具は用意した。最初は1人で運動する「的あて」などに集中していたが、後半になるにつれてグループでおこなう運動を多くのグループがしていた。2つのグループで何回できるか競争したり、グループで2対2に分かれうち合うなども見られた。これまでの経験などから、自然とゲームにつながっていくように感じられた。

（5）考察（授業と事後調査から）

①初めのうちははじき方も下からはじき上げるだけの子どもが多かったが、後半では体の横からはじいたり、頭の上からはじいたりする児童が見られるようになった。これはいろいろな運動をする機会をつくったこと

でいろいろなはじき方が身についたと考えられる。特に有効だったのは、はじきながらするリレーと4人ではじき合う運動である。この技能はソフトバレーボールにつながる動きと考えられる。また、補助運動で個人の運動を確保したことにより、ボールと自分との位置を把握する力やタイミングを取りながら捕ったり、はじいたりする力をつけることができた。



②多くの児童が風船を使うことを好んでいた。事後調査からでも90%以上の子どもたちが扱いやすいと考えている。これは、落下スピードが遅いことやはじくことの技能をあまり要さないことが理由としてあげられる。ボール運動の導入では、身近な物で恐怖心を持たせず、達成感をもたせることができるよい教具である。また、落下スピードが遅いことはよく見て動くことができ、友達との声のかけあいもできやすいという利点があると考えられる。しかし、子どもたちは風船をよく使っていたが、系統的につなげていくためには、30g、50gのボールを使うような課題（運動内容）も取り入れた方がよいのではないかと考えられる。

③事後調査から1人・2人・4人とするボール運動の中では、4人とする運動が楽しいと答えた子どもたちが一番多かった。これは、ゲーム化をすることにより「自分たちのチームが勝ちたい」という意識が応援や声かけなどに現れ、集団とする楽しさを味わうことができたことも考えられる。

実践②

単 元	ソフトバレーボール（ゲーム）
学 年	小学校第4学年（37名）
実践月	平成17年5月

（1）単元について

① 子どもの実態

本学級の子どもたちは、体を動かすことがたいへん

好きで、体育においてはいろいろな運動に意欲的に取り組むことができる。子どもたちのアンケート（5/2）では、全員が体育が「好き」と答え、理由としては、「体を動かすことが楽しい」「友だちといっしょに活動できる」「いろいろな運動ができる」「ゲームが楽しい」などと答えている。ソフトバレーボールについては、経験したことのある子どももいるが、基本的なルールや用語については、あまり知らない。ボールゲームをするうえで大切なことの質問に対しては、「チームワーク」や「ルールを守る」ことが多く書かれ、技術的なことについてふれている子どもは、少なかった。体育の学習場面においては、お互いの考えを交流させながら楽しく学び合おうとする場面が見られる。さらに本単元の活動を通して一人ひとりの意見を生かし、チームみんなで考え、工夫し協力できる集団づくりを目指していきたい。ここでの学習では、チーム内でのパスの受け渡しやみんなからの声かけを大切に、ミスをしたときでもお互いがカバーし合うなど、ゲームをしていくうえでチームワークの大切さに気付かせていった。

② 指導にあたって

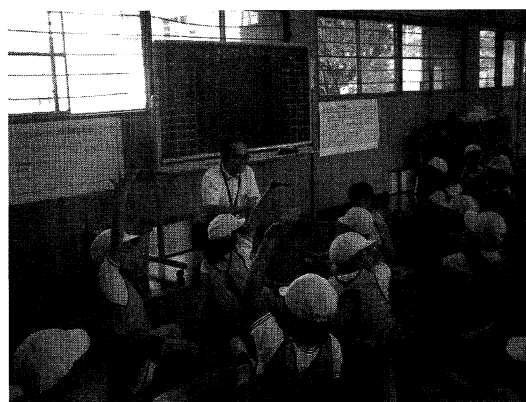
指導にあたっては、戦術アプローチの考えを取り入れて、「ゲーム→話し合い（練習）→ゲーム」の流れで単元を構成し、授業を進めた。理由は、ゲームにつながるドリル的な個々の技術練習をするよりも、ゲームの繰り返しによって戦術的課題が明らかになり、戦術と技術を結びつけて学ぶことで効率的に学習を進めていくことができると考えるからである。その結果、ゲームパフォーマンスの向上にもつながっていくことが期待できる。学習のルールやマナーをみんなで決め、確認しながら楽しく活動できるようにしていった。そして、友達の失敗を非難したり、勝敗だけを意識したりするのではなく、みんなで励まし合ったり声をかけあったりしてチームの雰囲気盛り上げ、一人ひとりのチーム内での存在感やチームプレーで貢献できたときの喜びを味わわせることにした。

(2) 単元の目標

- お互いに励まし合ったり認め合ったりしながら力を合わせて楽しくゲームができるようにする。
- チームの一員として、めあてや作戦に応じた活動を工夫することができるようにする。
- ソフトバレーボールの特性に応じた動きを身につけることができる。
- ゲームに対する戦術やルールを理解することができる。

(3) 計画（全8時間）

第1次 オリエンテーション……………1時間



第2次 対抗戦とルールづくり……………4時間

第3次 ソフトバレーボール大会をしよう…3時間

(4) 授業の実際

<第1次>

場づくりを見せて、どんなことを体育でしていくのか考えさせた。「バレーボール」「バドミントン」「テニス」などネット型の競技をあげた。何をしてみたいかの問いに対しては、「バレーボール」と答える子どもが多かった。バレーボールについてどのくらい知識を持っているのか聞いてみると「地面に落ちたらだめ」「サーブを打って試合が始まる」「スパイクが打てる」「ボールが当たると痛そう」「ぐるぐる回る」などの反応があった。ボールについては、知らない子どもがほとんどであった。そこで、ソフトバレーボール（50g）を見せると、「やってみよう」「打ってみたい」ということで二人組になって自由にボールをあつかわせた。

子どもたちに感想を聞いてみると「当たっても痛くない」「ゆっくり落ちてくるので楽しい」「試合をしてみたい」というものであった。そこで、ルールを決めず5人対5人のためのゲームを行った。ボールがつかない場面も少し見られ、子どもたちの意欲を高めることができた。最後にコートの大さきやネットの高さを確認して、次の授業までにグループをつくって目標を決めてくることを課題として出し授業を終えた。

<第2次>

体育館全体に4面のコートを作り、安全面の注意を行ったあとすぐに第1試合目を始めた。試合後に決めていかなければならない内容について話し合いをもった。子どもたちからは、

- ・審判はどうするのか？
- ・何回で相手コートに返すのか？
- ・片手でボールを扱っても良いのか？
- ・サーブは前から打っても良いのか？
- ・外に出たボールはさわってはいけないのか？

などがだされ、出された意見の一つ一つを確認して紙



に書いていった。

審判をお互いがしていくことについては、子どもたちから異論が出されたが、自分たちのコートのアウト・セーフは、責任をもって正しく見ていこうということになった。

次の時間からは、対抗戦ということで、ルールを確認しながら、試合を進めていった。子どもたちからは、試合を重ねるに従って、チーム内でうまくいかず、もめごとがでる班がでてきた。決まった子ばかりがボールにさわっている班や失敗した子に対して文句を言ったりする場面も見られ、チーム内でのもめ事が多くなった。

そこでマナーについて考えさせることと、作戦タイムのときにチームがまとまるためにはどうしたらよいかを考えさせて交流していった。後半からは、ゲームも3試合ができるようになり、チームの作戦に重点を置く話し合いが多く出てくるようになってきて、役割分担やみんなでボールつなぐためにどうしたらよいかを考えるチームが多くなった。試合でのセルフジャッジにも慣れ、スムーズにゲームが進むようになってきた。

<第3次>

ソフトバレーボール大会がいよいよ始まった。ボールのつながりもだんだんと増えて、各チームでの声かけも増えてきたが、リーグ戦ということもあって勝敗に対してかなりのこだわりをもつようになり、チーム内でボールを回すよりも1回で返した方が得点につながることに気づくようになり、ゲームが単調になってきた。ねらいとしてきたチーム内での声かけや繋ぐ事の楽しさがゲームの勝敗におされてしまってきた。そこで、子どもたちと話し合っ、みんなが楽しめるようにするために、自コートでは1回で相手コートに返さないというルールを付け加えることにした。すると、自分のコートでボールを繋ごうとするために、子どもたちの声かけや動きも良くなり大会を終えることがで

きた。

子どもたちのふり返りからは、

○チームでボールがうまく繋がった。

○バレーボールがうまくなった。

○チームの作戦がうまくなった。

○友だちに「ナイス」「ドンマイ」などと声をかけられた。

●なかなかボールが回ってこなかった。

●相手のジャッジに納得がいかない。

●チームの仲間からいやなことをいわれた。

などがだされた。

(5) 考 察

①ゲーム中も自分たちの考えた作戦を意識することができ子どもが確実に増えていった。それは、戦術的アプローチの考え方を取り入れて、「ゲーム」から入り、「話し合い」(ルールづくりや作戦)を行うサイクルの繰り返しによって、作戦面で具体的に「どう動いたらよいか」繰り返し話し合うことができたためであると考え。

②友だちと意見が合わずトラブルになるチームもあったが、チームが盛り上がるための声かけや動きを指示する声もだんだんと聞けるようになってきた。チームワークの大切さ(うまくいったときの喜び)(失敗したときの声かけ)に気づき、調和をとろうとする態度が見られるようになった。

それは、試合数を多くし、話し合いの時間を持つことで自分に意見をチーム内にいかせることができたためであると考え。

③試合が進むにつれて、ボールを繋いでいこうとすることが少なくなり、コートのいろんな場所からアタックをして、ネットにかけることが多く単調なゲームになってしまった。だんだんと勝敗を意識するようになったことやネットの高さを140cmと低く設定したために後ろからでもアタックできると感じたためである



と考える。4年生でボールを繋ぐ楽しさを追求させるために、ネットの高さを変えることや自分のコートでは2回以上繋ぐなどのルールが必要になってくると考える。

実践③

単元 バレーボール
 学年 中学校第2学年(41名)
 実践月 平成17年5月

(1) 単元について

① 題材について

バレーボールは、ネットをはさんで2つのチームが、空中にあるボールをつないで攻撃や防御をして得点を競い合う運動である。相手プレーヤーとの身体接触の場面がなく、自分たちのチームの働きを直接阻害されることなくプレイできるという特性を持っている。個人的技能の要素としてはボールにタイミングを合わせることが重要なポイントになってくる。また、特性として次のこともいえる。安全性が高い。全身の運動である。集団としてのプレーが中心になり、集団と個人との相互依存関係を深めることができる。学習者の能力に応じて学習活動を与えることができる。バスゲームからの発展段階がわかりやすい。学校を離れても生涯にわたって行うことができる。

② 生徒の実態

本学級の生徒は、小学校で学習した内容の中で「球技が好きだ」とほぼ全員の生徒が答えており、昨年度もソフトバレーボールに、多くの生徒が意欲的に取り組む姿勢が見られた。「好き」と答えた理由の多くが、昨年と同様に「みんなとできること、みんなでがんばれること」と答えており、集団として、仲間と活動し、取り組むことに喜び、楽しさを感じている生徒が多い。

③ 指導にあたって

バレーボールの楽しさは、ゲームの中でラリーを続けられることである。しかし、バレーボールでは高度なボール操作技能を必要とし、ラリーの楽しさを味わえないまま授業を終えることが多かった。そこで、ラリーを続けるためのボール操作技能を高めるための活動を多く取り入れた授業を展開し、ラリーの楽しさを体験させ、ラリーの中で攻撃を意識させたゲームへとつなげていきたい。また、バレーボールが集団で行う球技であるので、役割分担や作戦などのチームワークが欠かせないこと、個々のプレイヤーがチームを支えるので、個人技能の向上がチームにとっても欠かせないこと、さらに、それらを高めていくために本年度はゲーム性のある活動(練習)の中で個人の技能を向上させていくことを学習させていきたい。また、それら

を通じてバレーボールの楽しさであるラリーの楽しさを味わわせ、今後も機会があれば進んでバレーボールをしたいと思うよう指導していく。

(2) 単元の目標

- 個人に応じたためあてを設定したり、チームの課題に向けた攻防の仕方を工夫させる。(思考・判断)
- チームにおける、自己の役割・責任をふまえ、楽しみながら取り組むことができる。(関心・意欲・態度)
- 自己の能力やチームの課題解決に必要な基礎的技術を身につけることができる。(技能)

(3) 計画(全9時間)

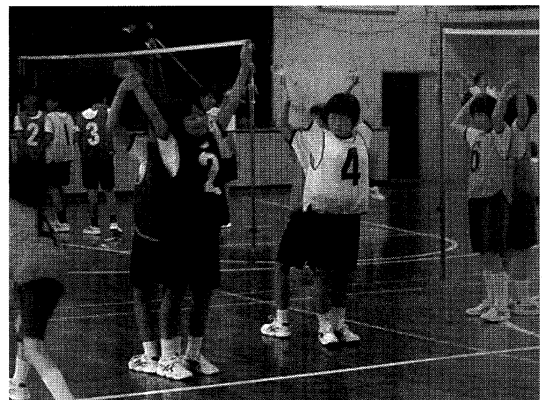
- 第1次 オリエンテーション……………2時間
 (学習のねらい、進め方、ルール、チームや自分の目標を決定する)
- 第2次 技能の向上に応じた練習を行いゲームを楽しむ……………4時間
- 第3次 基本技術を身に付けながら、ゲームを楽しむ……………2時間
- 第4次 学習してきたことを評価し、まとめをする……………1時間

(4) 授業の実際

<第1次>

オリエンテーション

オリエンテーションにより、今回のバレーボールの授業でどんなことを行っていくのかを考えさせた。今回のバレーボールでは、公式球を使っていくことを伝え、今一番やってみたいプレイはの問いに対して、「スパイクを打ってみたい」「サーブを打ちたい」「ゲームをやりたい」など、攻撃にかかわった技能、ゲームに強く興味を示した。そこで、まず、二人組で公式球を使ってパスをさせてみた。これまで扱ってきたボール(ソフトバレーボール)との違い(重さ、柔らかさ)にとまどうのではと予想していたが、生徒たちは逆に公式球の重さ、感触を楽しんでいた。



また、スパイク、サービスの基本となる腕の動きを練習させたところ、これまで味わったことのない感を試すかのように取り組んでいた。

今後の授業について、ゲームを中心に進めていくことを伝え、ルール（公式ルールを元に当初は教師が提示したルールを採用していく）、コート（チームの人数により大きさを変えていく）、チーム編成（技能に合わせて4対4まで増やしていく）、個人の目標（パス、スパイク、サービスなどの個人技能とチーム内での役割による）、チームの目標（ゲームにおける）を考えさせて授業を終えた。

<第2次>

技能の向上に応じた練習を行いゲームを楽しむ

前時での個人の目標を確認させペアでの活動へと入っていった。ペアの組み合わせとして、男女別で身長が同じぐらいの生徒とのペアリングとした。その理由として、男女の体力差とスパイク、パスなどの練習へ取り組む上で、ネットの高さ、技術練習などを考慮したためである。

授業の流れとしては、まず始めに、一人一人がパスの練習を行った。オーバーハンドパス、アンダーハンドパスの2種類について、直上パスの回数を毎回記録していった。その練習のなかでペアでお互いのフォームをチェックしていき、アドバイスカードに記入し技能の向上を図った。次に、対人パスを行っていったが、ネットを挟んで行うことにより、つねにネット（ゲーム）を意識した練習を行った。①オーバーハンドパスのみ、②アンダーハンドパスのみ、③オーバーハンドパス、アンダーハンドパスを組み合わせるなど、生徒たちがお互いで約束（ルール）を決め、確認しながら練習に取り組んだ。また、三段攻撃の意識づくりとして、一人での三段攻撃、アンダーハンドパス（レシーブ）→オーバーハンドパス（トス）→スパイク（フェイント）の練習を行わせた。また、2対2により三段攻撃を意識させたゲームを行うことにより、セッターの役割とフォーメーションを理解していった。スパイクに関しても、高いトスだけでなく速攻（Aクイック、Bクイック、Cクイック）なども積極的に使っていくチームも見られた。その後、3対3へと人数を増やすことにより、攻撃のバリエーション（作戦）を考え、作戦カードにそれぞれの動き、役割を記入していった。

ボールに3人全員がかかわることを全体の課題、目標として行った。それぞれの役割がはっきりとしていることで、生徒たちが積極的にゲームに取り組む姿が見られた。最終的に4対4へと人数を増やし、ゲームを行っていった。

<第3次>



基本技能を身に付けながら、ゲームを楽しむ

前時までの授業を振り返るなかで、ゲームでの三段攻撃を、スムーズに行っていくには、正確なパス（一本目のパス（レシーブ）、二本目のパス（トス））が必要であるとの感想が多く出るようになった。そのためペアでのパスゲームを授業の始めに練習として再度取り入れいった。また、スパイクに関しても一人だけの単調な攻撃だけでなく、セッター以外の全員が攻撃者としての動きづくりを考え、練習に取り組んでいった。その後、4対4のリーグ戦を行いチームの作戦、課題についての確認をしていった。リーグ戦のゲームではプレイすることだけでなく、審判、ラインズマンなどについても学習を進めていった。

<第4次>

学習してきたことを評価し、まとめをする

授業のはじめから続けてきたパス（オーバーハンドパス、アンダーハンドパス）の記録及びペアによるフォームチェック表をもとに自己評価を行うとともに、スキルテストを実施した。また、ゲーム記録により、チームにおける課題について各チームごとに評価していった。あわせて、「バレーボールの学習を振り返って」のカードを使い、バレーボールという運動の楽しさについて、仲間とともに互いに助け合い高め合う学習を進める喜びについて、自ら計画・目標を立てて自発的・自主的な学習を展開することについて、バレーボールの運動技能の高まりについて、将来の運動への期待について自己評価し振り返った。また、仲間とともに学習する喜びを確認し授業を終了した。

（5）考察

①今回、初めて公式球を使用してバレーボールに取り組んだが、生徒たちはこちらの予想に反してボールが手、腕にあたることをいやがらず逆に公式球でのバレーボール技術習得に積極的に取り組んでいた。これまでのソフトバレーボールとの違い（重さ・感触）が、

逆に生徒たちにとっては、バレーボールというスポーツに本格的に取り組める喜びに変わっていったためと考える。また、個人技能習得を大きな課題として、ゲームを取り入れた内容を進めていったが、その中で、生徒からパスの大切さや重要性が振り返りとして多く出てくるようになった。授業当初に生徒たちから出たスパイクへの強い関心をもとに、三段攻撃からの多彩な攻撃パターン、フォーメーションを考えさせていったことが、積極的に三段攻撃をゲーム中に使っていこうとし、三段攻撃を成立させるためには、正確なパス（セッターに正確に返すレシーブ、セッターからスパイカーへのトス～生徒の振り返りから～）が必要不可欠であることにつながったと考える。

②今回の授業では競技としてのルールを大切にしながら、コート大きさ（3m×3m・3m×4.5m）、ネットの高さ（2m10cm～中学校女子～）、人数（2人～4人）を変えてゲームを行ってきた。そのことが、ゲーム内でのパスを容易にする一つの要因になったと考えられるが、正規のコートでのパス（レシーブ、トスなど）になってくると、ここまでのパスの個人技術にはまだ課題が残る。

しかし、生徒たちのねらい、課題に応じてルールを変えながらゲームを取り組んでいくことが有効であったと考えられる。また、今回は、自分たちのチームの攻撃を中心としたゲームになったため、今後の課題として相手チームの作戦、攻撃に対する動きづくり（チーム、個人ともに予測を含めた動きづくり）に取り組ま

せていきたい。

4. おわりに

小中一貫で、バレーボールの系統性を考えて、不十分ではあるが9年間の見通したカリキュラムづくりをおこなってきた。授業の中で、子どもたちがお互いに自分の意見を出し合って、自分たちにあったゲームを考えていこうとしたり、チームの調和を図るための声かけをしたりする場面が見られ、バレーボールがコミュニケーションスキルを育てるのにたいへん有効であることがわかった。このことは、体育科で模索している「協同的創造学習」を行う上での大きな指標になった。さらに、運動量を確保するための授業づくりや学習環境など学年に応じた内容を吟味していくことが必要になってくると考えている。

【参考・引用文献】

- 小中一貫における攻守混合型ボール運動のカリキュラム開発（1）
広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要
第32号 2004. 3 別冊
- 混合型ボール運動における状況判断能力の育成
ーフラッグフットボールを教材としてー
一貫教育実践研究第4集
広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校
2003.3 p 127-138